

第24回Kozoom テーマ 「思い出の音楽」

清水健二

「歌は世につれ世は歌につれ」と、歌は世情をよく反映しているので歌を耳にすると、その歌が流れた時代を思い出す。時にはその頃の心情まで鮮明に浮かんで来て懐かしく感じる。 前回の「映画の思い出」以上に幼い頃から歌は人の心の底に定着していて、リズムなどは身体が覚えているように思う。しかも死ぬまで忘れそうでないので歌の力はすごいものだと改めて痛感する。

私は歌の記憶は唱歌よりも軍歌が始まりのようである。日本が軍拡強兵を目指し、国民に浸透させる手段として軍歌を広め、少年だった私にも、(我が大君に召されたる・・・)に始まる「出征兵士を送る歌」であり、(勝ってくるぞと勇ましく・・・)の「露営の歌」等が、私にとって曲と歌詞が一緒にでてくるから80年を経ても記憶に残っているから恐ろしい。

戦後は、(今日も昨日も異国の丘に・・・)から始まる「異国の丘」である。シベリアに抑留されていた兵士の間で歌われていたもので、作曲家吉田正氏が抑留されていた実体験によるものらしい。また、引揚船で舞鶴港に帰ってくる息子を迎えようと、母親が待ち焦がれる「岸壁の母」の歌もある。1954年、菊池章子が歌い始め、後に二葉百合子が長く歌い続けてきた。

私の中学校時代に同じクラスに、クラシック音楽に通じたK君が、私の顔をみると寄ってきて家に遊びに来いと言う。誘いに乗って行くと、蓄音機でレコードをかけてくれ聞かせてもらったのが、ベートーベンの「運命」だった。私の心に響く何かがあったのだろう。それと彼はクラシックについての話を色々解説してくれた。そんな話のできる友達を羨ましく思い、自分も少しはクラシック音楽について会話できるようになりたいと言う気持ちが関心を抱く第一歩だった。彼とは高校は違っていたが、交流は長く続きよく会って西欧音楽を楽しんだ。

私が社会人になった1958年、入社した会社で配属された事業部門の中の設計部は、部長と課長3人を含み30名ほどの組織だった。新入社員として私と他に2名を迎え入れ、歓迎会を開いてもらった。会社の中の宴会は初めての経験だった。宴席は無礼講と言うわりに結構先輩、後輩の間隔は明白だった。新入社員に向かって「歌でも唄へ」と言われ「不調法ですから」と断われぬ雰囲気だったので、私は(花も嵐も踏み越えて・・・)と愛染かつらの主題歌「旅の夜風」を手拍子よろしく唄った。「よし、ええぞ！」と拍手をもらったが、何が良かったのか判らなかった。多分協調性

が良かったのかもしれない。今思い出しても恥ずかしい一幕で、10歳も20歳も年上の多い社員の宴会は、すでに戦後10年以上も経て新しい歌謡曲も流行していたが、昔からの民謡や古い馴染みの歌で盛り上がったものである。

その頃にはすでに米国文化が洪水のように押し寄せて来ていて、音楽の分野ではジャズを始めカントリー、ハワイアン等新しい世界が広がっていた。日本でも服部良一等はジャズ界を牽引した中心人物だったように思う。一方若者の間でも人気だった「うたごえ喫茶」等へ出かけ、ロシア民謡や労働歌、童謡や歌謡曲などみんなで合唱し、学生時代は色々なジャンルの歌を覚えたものである。



「歌声喫茶」

結婚してから、細君は子供の時から児童合唱団に入っていて、歌についてよく知っていたので、皆目無知な私は唱歌や聖歌等を聴かされたものである。80歳を超えた今でも「ママさんコーラス」を経て「シルバー合唱団」で唄っている。もう20年以上も前にウイーン楽友協会の招きがあって、現地のイベントに出演するため合唱団員達とウイーンまで出かけ、音楽堂(黄金の間)で唄って来た時の感動をよく聞かされた。シュテファン大聖堂で聖歌を聴いて音響の素晴らしさを何度も語っていた。歌の魅力ってのはまさに一生ものだなと思っている。



ウイーンの音楽堂



シュテファン大聖堂

現役時代、職場に1年先輩がいて何かにつけ相談できる人だった。そのKさんはクラシックが好きで、なかなかのインテリだった。仕事以外の話もよくしだし教えられる事が多く、飲みに行っても先輩面しないところが良かった。たまたま一緒に横浜へ出張した時、藤沢にあるKさんの奥さんの実家へ私を案内してくれ泊まったことがあった。私は恐縮しながらも50年ほど前は、昔ながらの家は部屋数も多く、今の人と違って他人を自宅に招いたりする事にさほど抵抗はなく人情の厚い時代だったと思う。

そのKさんが私に自分が好きなクラシック音楽を録音したからと、テープをプレゼントしてくれた。その中にヴィヴァルディの「四季」やモーツァルトの「Eine kleine nachtmusik」があつて、ドイツ語で書いてあつた。モーツァルトの曲は長調が多く、爽快で明るく華やかで、気分転換によく聴いていたので知っていたが、Kさんも好みの曲だったのかと、その後これらの音楽を耳にすると、50歳半ばで早逝したKさんのことが無性に懐かしく思い出される。

クラシック音楽以外のジャズやロック、フォーク等も好きでよく聴く方だが、サラリーマン時代はなんと言っても退社後のコミュニケーションは、バーなどで飲んだり、ぐちったりしながらも、歌は不可欠なもので、もっぱら歌謡曲や演歌が主流であつた。概して演歌の好きな人が多く、今になっても歌が流れてくると、これはDさんの十八番だったな、どうしているかなと思う。

美空ひばりや小椋桂が唄う「愛燦燦」が聞こえてくると、神田の飲み屋まで浮かんで来て、A君は良い声で唄ったな、そしてよく働いた男だったなと思ひ出す。また宴会でお開きにしようかと言うと必ずでてきて、最後はみんな合唱しようと（星よりひそかに・・・）の橋幸夫と吉永小百合の「いつでも夢を」を唄い始めたB君を思ひ出す。軽快でみんなが唄い気持ちよく解散したものである。



「いつでも夢を」

サラリーマンを卒業して、職場の人達と別れた頃は、すでに音楽の世界も拡大し変化も激しく、J-Popと言われる日本生まれのニューミュージックやロック、フォークソングなどが流行って来ていた。近年はメロデーよりリズムを好み、テンポの速い歌やダンスに変化して来て、私にはとてもつ

いて行くことはできなくなった。



「カーペンターズ アルバム」

かつて一世を風靡したカーペンターズのピアノとボーカルの「イエスタデイ・ワンス・モア」、とか、はしだのりひことシューベルツの「風」などボーカルものを楽しんでいる。歌の題名を見るだけで、イントロがでてくる尾崎紀世彦の「また逢う日まで」は若い時の気持ちが甦るから元気になってくる。

最近では歌謡曲の歌詞に興味を持ちはじめ、阿久悠やなかにし礼等ヒット曲を出し続けている作詞家の言葉の使い方、喜怒哀楽の表現の上手さ、愛憎や情念、心情を語る言葉の数々

に、やはり並の人でないと敬服し、曲と詞の両面から感心する事が多くなってきた。

話はあっちこちに飛んでしまったが、歌と出会った人達の思い出は際限がなく多い。時代の歌に沿ってそれぞれにお付き合いした人達のことを浮かんで来て懐かしい。

残念なことに、私は歌を聴くだけで何一つ楽器が弾けない事である。少しでも習っておけば、もっと多くの音楽仲間に出会えたであろうし、私の人生も心豊かになっていただろうと悔やんでいる。歌は人生のアルバムだから、アルバムの量はもっと増えた事であろう。

(もしも ピアノが弾けたなら・・・)のメロデーと詞に悔しさをぶっつけている。作詞は阿久悠、歌は西田敏行で好きな歌の一つである。

令和4年6月記